● シリーズ　私の見た日本　Vol.217

写真で捉えた日本の共生の美意識

関沖（セキ オキ）

1997年中国北京生まれ。
2024年3月静岡文化芸術大学大学院デザイン研究科博士前期課程修了見込み。水環境の共生設計についての研究を取り組んでいる。
2024年4月株式会社イリア入社予定

始めに

2022年、撮影に魅せられた私は、日本に留学していた貴重な期間に、よく日本の都市を旅しながら一眼レフで美しい瞬間を収めていた。私にとって写真は心の奥底にある感情を伝えるメディアであり、感じたことを最も直感的に表現できる方法だ。心を静め、過去の写真を優しくめくる時、日本の共生の美意識はまるで絶え間ない映画を見ているように、私の心を弾ませる。

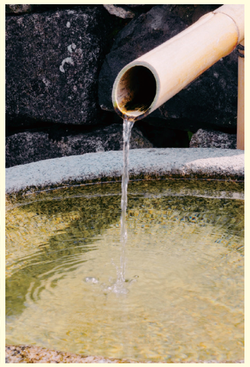
旅のなかで撮影した写真とともに、私が日本で見つけた美しい瞬間や発見を紹介したいと思う。

奈良公園の鹿

国営ひたち海浜公園

大阪 道頓堀

京都のまちなみ



京都の寺院にて

公園から

まず最初に訪れるのは奈良公園である。風光明媚な公園には古寺が点在し、園内には奈良国立博物館が佇むほか、人なつこい鹿たちも自由に歩き回っている。のんびりとした姿勢は、見ているだけで微笑ましく、まるで時が止まったかのような穏やかな雰囲気が広がる。『万葉集』に詠まれた「鹿の声」からも分かるように、奈良では古くから鹿がこの地を彩ってきた。時代が移り変わっても、奈良の風景は変わらず、奈良ならではの趣が今も息づいているのかもしれない。

このように自然と調和することは、日本が持つ美意識のひとつだと思う。

次の写真は国営ひたち海浜公園である。広大な敷地は様々なエリアに分かれ、春にはネモフィラ、秋にはコキアなど、一年を通して四季折々の花々が咲き誇る。アミューズメントパークや観覧車、バーベキュー広場などの施設もあり、一日中楽しむことができる。奈良公園と同じく、ここでも自然がテーマとなり、満開の花々を通して自然の美しさが表現されている。

日本の公園は、日本の文化や美意識を反映していると思う。日本の人々は自然を鑑賞するだけでなく、自然と人間の一体感を大切にして共生の精神を重んじている。人間も自然の一部という意識が育まれているのだと思う。

都市から

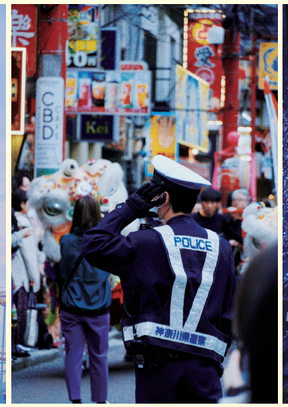
日本にある様々な都市は、それぞれ異なる印象を人々に与える。そのため私は、都市のデザインに焦点を当てることは日本の美意識を理解するための直接的な方法のひとつだと考え、大阪、神戸、京都、鎌倉、横浜、東京を訪れた。

道頓堀川は大阪で有名なスポットとして観光客が集まるスポットである。賑やかなエネルギーにあふれていて、街を歩いていると優しくゆっくりと時間が流れ、控えめで活気のある街だと感じた。

神戸は山と水に囲まれた都市景観を形成していた。日本を代表する港湾都市として、世界中の異なる文化や伝統が融合したエキゾチックな感覚をもたらし、多様性を受け入れる開かれた雰囲気を持っている。

京都は「和」を感じられ華やかな歴史と受け継がれてきた伝統や文化に触れ合えるだけでなく、新たに芽生えたカルチャーを発見できる場所として、国内外から人気を集めている。京都の街を歩けば、趣のある小道や美しい景色が広がり、多くの人が伝統的な衣装である着物や浴衣を身に纏い、街を散策する姿が見られるのも特徴である。伝統的な装いが京都の風景と見事に調和し、街全体に

横浜



横浜の中華街

イルミネーション

花火

風雅な雰囲気を醸し出している。

山の間に広がる鎌倉は、海に近く、穏やかな時間がゆったりと流れ、濃い緑に覆われた山々、爽やかな海風と古い寺院が、時の流れとともに色褪せず鎌倉の独特の趣を漂わせている。

横浜は、幅広い商業施設に囲まれ日夜多くの人で賑わう都会の喧騒とは一味違った魅力を感じた。中国文化が色濃く反映されており、異国情緒あふれる街の姿は、日本ではなかなか味わうことのできない独特の雰囲気に包まれている。

最後の東京の魅力は、街が常にリニューアルされ続けていることである。古くから市街地として発達しており、老朽化したビルや住宅は高層ビルやマンションに建て替わっていく。足元の歩道や公園、植栽などが整備されているところからも東京のユニークな個性を感じる。東京駅から西に真っ直ぐビル街を進むと、黒松や芝生の手入れの行き届いた広い空間が現れ、空気感が変わる。南東にある楠木正成像は今にも人馬一体となって走り出しそうなほど躍動感に溢れていた。都市建築は中高層ビルが多く、コンクリートを主体とした建材の「重厚感」は、日本建築の「軽快」な木造文化とは異なる。ちなみに日本のデザイナーである安藤忠雄氏は、コンクリートを極限まで追求し、建築構造の合理性と技術の美しさを人々に再認識させた。

以上から、日本の都市は、合理的な技術に基づきながら、それぞれの都市が持つ独自の雰囲気を建築的思考に反映させて造られているのだと思う。日本の都市デザインは代々のデザイナーの継承と革新の中で生まれ変わってきたが、文化の土壌と切り離すことはできない。この視覚言語は人々の感情に影響を与え、日本に住む人々に自然への回帰を補わせる。

神社から

日本には多様な庭園や神社があり、静寂の美が反映されている。人々を瞑想的で静かな心地に誘い、過度な誇張や騒がしさから遠ざけているのだ。

日本独自の美意識は、わざと装飾や外見を強調せず、物事のシンプルさを強調し、時の試練に耐える自然な美を追求するのだと理解できる。実際、静寂の美は天と地に対する人間の謙虚さと敬意を表現している。庭園や神社で感じる静けさは、物事の本質に対する深い理解とともに、自然との調和を求める日本の美意識の一環なのである。

日本の文脈では、常に自然と一体化し、謙虚さを示すことが重要視されていると思う。自然に浸りながら、人間も自然のなかの一部に過ぎないと感じる。そして自然は不完全であることや時の経過を許容するし、時には自分自身との境界にもなり得る。こうした美意識は日本文化全体に根付いており、日本人の日常生活にも影響を与え、自然との調和、謙虚さ、物事のシンプルさを大切にさせる。それらは私に深い感動を呼び起こす。

イベントから

最後は、日本の風情ある美についてだ。日本に住んでいると、イベントを通じて街の人情味を感じることがよくあった。

例えば花火大会では、浴衣を身にまとって日本の伝統的な祭りを体験したり、屋台を歩いたりしながら、花火に照らされた夜空を楽しむことができた。ハロウィンの渋谷では、人々が様々なキャラクターのコスプレをして、国籍や肌の色も関係なく、賑やかに多様な国の美意識を見ることができた。クリスマスには街は白いイルミネーションで飾られ、建物の前には背の高いクリスマスツリーが立ち、一気に雰囲気が華やかになっていた。

このように、特別な瞬間や季節の変化は人々に喜びと感動をもたらしている。日本の美意識は単なる風物詩や行事だけでなく、人々が交わり、共有し合うことでより豊かなものとなっているのだと思う。

終わりに

日本の公園や都市、庭園や神社、街のイベントの風景や文化は、ただ見るだけでなく心に深く刻まれるものだった。日本の様々な場所を訪れ美意識に触れたことで、その深さと多様性に改めて感動した。静寂の美、自然との調和、そして季節やイベントを通じた人々の交流が日本の美の真髄であると感じられた。これらの経験は私にとって宝物であり、これからもその美しさに触れながら、日本の風情を心に留めていきたいと思っている。